

合 には私だけではないと思います。

題材法話

前号からのつづき

人はだれしも、人生そのものに意義を感じたいのです。

人生を送る上で、そういった思いは必要で、いわゆる向上心にもつながるものでしょう。

ところがやっかいなことに、どこまでいってもこれに満足だということには、なかなかなりません。むしろ足りないところばかりが気になります。

それでもある程度年齢を重ねてくると、さすがに地位や財産や名譽といったことがついてきます。けれども今度はその年齢が、大いに気になってきます。

少しでも健康で長生きしたいと、いろんな薬を飲んだり、さまざまな試みをする。

○人生の「意義」

から「意味」へ

信楽峻麿先生

（仏教学者・龍谷



大学元学長）は「人生に『意義』を求めるのではなく、『意味』を求めるのではありません。『意味』を求めなければならぬ」と仰られました。

財産や地位や名譽を追いかけて、長寿を願って人生を歩んでいても、最後の最後には限界がやってくる。そしてだんだん不安がよぎってくる。

「実は人生を考える上で自分はどうして人間に生まれてきたのか？」と「この先どこへ行くのか？」と「この先どうするか？」と「この先どうするか？」と「この先どうするか？」と

「この先どうするか？」と「この先どうするか？」と「この先どうするか？」と「この先どうするか？」と「この先どうするか？」と「この先どうするか？」と

○四門出遊

お釈迦様が、釈迦族の王子であつたこと

とはご存じだと思ひます。

お釈迦様は、王子としてお妃様もおられ、お

様もおられ、お



二人の間にはお子さんもおられませんでした。

一國の王子で、釈迦族というも名譽もあり、生活に不自由することなどは無かつた。

そのお釈迦様がある時、郊外に出かけられ、城門から外に出て、道をまわると、そこには、老人に出会われました。

「自分もやがて老人になることに気が付き、一人は何故年々老いるのか」と、疑問を持つて悩まれるのでした。

「そしてまた今度は何故かから出て、病人に出会われ

「そしてまた今度は何故かから出て、病人に出会われ

「そしてまた今度は何故かから出て、病人に出会われ

「そしてまた今度は何故かから出て、病人に出会われ

「そしてまた今度は何故かから出て、病人に出会われ

「そしてまた今度は何故かから出て、病人に出会われ

「そしてまた今度は何故かから出て、病人に出会われ



それを超える世界を求める人達です、と聞いて、深く心に感じ、王子としてのすべてを捨て去つて出家者になることを決意されました。

これは「四門出遊」というお釈迦様の有名なエピソードです。

○仏教の原点

お釈迦様は、一國の王子として、地位も名譽も財産にも恵まれ、「人生の意義」を感じ

「人生の意義」を感じ、と「人生の意義」を感じ、と「人生の意義」を感じ、と「人生の意義」を感じ、と「人生の意義」を感じ、と「人生の意義」を感じ、と

「人生の意義」を感じ、と「人生の意義」を感じ、と「人生の意義」を感じ、と「人生の意義」を感じ、と「人生の意義」を感じ、と「人生の意義」を感じ、と

「人生の意義」を感じ、と「人生の意義」を感じ、と「人生の意義」を感じ、と「人生の意義」を感じ、と「人生の意義」を感じ、と「人生の意義」を感じ、と

「人生の意義」を感じ、と「人生の意義」を感じ、と「人生の意義」を感じ、と「人生の意義」を感じ、と「人生の意義」を感じ、と「人生の意義」を感じ、と

（仏法總會

住職法話より）

